

## プレゼンよもやま話

現在のプレゼンテーション（以下プレゼン）のほとんどはパワーポイントに代表されるプレゼンソフトを使っています。筆者が経験してきたプレゼンの変遷を振り返りたいと思います。私の初めてのプレゼンは、高専の卒業研究の発表でした。1枚の模造紙にまとめるのではなく、1スライド1枚の模造紙を使ってのプレゼンでした。ワープロも無い時代ですから、模造紙に手書きで作成します。模造紙の上部2か所に付箋を付けておき、これを釘に差し込みます。発表練習が終わると、この付箋を再度貼り直すこととなります。模造紙本体が切れないように注意が必要です。なんと、原始的な方法だったことでしょう。ちなみに、新潟県では模造紙のことを大洋紙（たいようし）と呼びます。「大」きな「洋紙」に由来するとされていますが、新潟県人が東京で通じないことばの代表格だそうです。呼び方で出身地がわかる場合があるようです。

その後「スライドプロジェクター」が登場します。未だPCが無かった時代、発表用の図表は製図用具を使って作成します。当時、よく使われていたのがロットリング社の製図用具でした。そのため図表を作ることを「ロットリングする」と言っていました。文字は定規に書かれたアルファベットや数字をなぞって書きます。活字っぽく書けますが、数字の8は難しかったです。最初に下の○を書き、定規を少しずらし上の○を書くのですが、微妙に傾いてしまいます。この8がうまく書けるようになると一人前と言われました。書き上げた図表を写真撮影し、現像したフィルムを梓紙に貼付けてスライドにします。このスライドは白黒ですが、ジアゾフィルムに転写することで青い地に白い文字を使った「ブルースライド」にすることも出来ました。また、暗室不要のスライド作成機が開発されました。原稿を台の上に置き、フィルムをセットしてボタンを押せば2分後には、ボジのマウント付スライドが完成するという、画期的な商品で大変重宝しました。余談ですが、学会発表会場にはスライドプロジェクターを操作する「スライド係」が配置されており、「次、お願いします！」の言葉を受けて、スライドを進めていました。さらに、スライドの時代からオーバーヘッドプロジェクター（OHP）の時代に変わりました。トランスペアレンシーとよばれるA4サイズの透明シートに描いた図表をスクリーンに映し出す方法です。これでスライド係が不要になりました。原図を複写機でコピーする方法が便利で一般的でした。原図が小さい場合は、任意の倍率で拡大コピーしたいことがありますが、うまく中央にコピーするのが難しいです。そこで、容易に原図の設定位置を決めることができるように、OHPシートにスケールを書き込んだものを用意しておきこれを用いたマニュアルによるセンタリングにより、大きく見やすいOHPシートを作成することが出来ます。このアイデアを日本化学会「化学と工業」のアイデア欄に投稿しました（宮正光、OHPシートへの複写法—上手にコピーするために—、化学と工業、1989、第42巻、第9号、p.143）。査読があり、参考文献の追記を指示され掲載されました。なんと、原稿料を頂戴したのですが、別刷代金で消えてしまいました。

回想と伴に将来のプレゼンのツールはどのような機能で、どんなものになるのか夢んでいます。

（分析支援グループ 宮 正光）